

同人誌「胎動」より

転載

石段にて

たなか 踏基

発行所 新潟大学工学部胎動編集局
平成十五年五月大幅加筆修正版

守屋山は、下諏訪町の北西部にある標高850メートル余りの山である。

諏訪湖を挟んで南側の守屋山麓に上社があり、北側に下社があった。

上社はそれぞれ本宮（諏訪市神宮寺）と前宮（茅野市安国寺）、下社は秋宮（下諏訪町上久保）、春宮（同町大門）に分かれていた。諏訪大社は、上社が建御名方命（たけみなかたのみこと）、下社が八坂刀売命（やさかとめのみこと）と息子と母の祭神を祀っていることでも知られている。全国的に支社を有する本宮の諏訪大社といえ、先ず御柱祭に触れねばならない。

御柱祭は、七年目ごとの寅（とら）と申（さる）の年に行われる日本三大奇祭の一つである。出雲大社の大黒柱、伊勢神宮の心柱、諏訪の御柱が日本三大奇祭と言われている。「式年造営御柱大祭」は信濃国あげての最大規模の祭り、起源は約千二百年前の平安時代まで遡る。上社と下社に分かれ、それぞれ四月に山出し祭、五月に里曳（び）き祭が行われる。上社は八ヶ岳・

御小屋山の大神社有林から、下社は霧ヶ峰に近い下諏訪町東俣国有林から、いずれも直径四尺もある樅（もみ）の巨木を切り出して曳く。四つの社の幣拝殿、宝殿を中心とした社殿の四方、正面に一之、二之御柱を、裏手に三之、四之御柱が建立される。

ついでながらこの下社秋宮の三之御柱は、堀新田町の曳子（ひきこ）がひいた御柱で、山出しの最も危険な「木落とし」で平尾郷の二人の若い曳子が六十五石の御柱の下敷きになり、あつという間に圧死したという因縁付の御柱であった。昔から、この曳衆が樅（もみ）の巨木に跨り一機に坂を下る「木落とし」は、この御柱祭の最大の呼物で、諏訪地方の血気盛んな若者や祭り好きの壮年曳衆の心を躍らせる光景であった。毎年死傷者や怪我人が続発し、その逸話も絶えなかったが、「木落とし」の怪我は、地元の曳子にとって不名誉とされた。

目通り八尺二寸、長さ十二間という太さからして当然、下社秋宮の神社正面に相応しく、二之御柱として充分過ぎるほどの御

柱だった。この血を吸った因縁の御柱の地面から三間ほどの高さに、くつきりと血痕が残ったと伝えられるが、今ではその痕跡も見当たらない。人間二人の死傷事件のため格下げとなり、三之御柱として神社裏手に曳立てられたのである。死傷という最大の不名誉の格下げを、堀新田町の曳子が残念がったことは言うまでもない。こうした出来事を面白可笑しく口伝する者が、亡くなった今では、そうした土地の逸話もすっかり風化してしまつたよつだ。

守屋山の中腹の上社本宮と、それより東側よりの平地の下社秋宮の距離は、半里余りであった。上社の境内にある展望台から、下社の森は容易に見下ろせた。下社から上社に行くには、昭和十六年に完成した堀新田町へ通ずる新道を利用した方が何かと交通の便は良かったのだが、この急峻な石段を登っても行くことができた。新道とは、迂回して通ずるゆるやかなバス道で、守屋山入口の停留所でバスに乗ると次が下社前で、その次が上社前であった。

下社には二つの社があつて 四月十五日の春宮祭、十月十五日の秋宮祭と年二回の例祭が行われた。それぞれの社を春宮、秋宮と人々は呼んでいた。古くは、例祭になると猪鹿の頭七十五頭を俎に載せて、神殿に供えられたと伝えられ、その神事の名残として、木の猪鹿の頭をそれぞれ一つづつ

大きな杉の俎に載せて神殿に供える儀式が今でも現存している。

急峻な石段は、下社裏手の奥まった三之御柱の根本から始まっていた。石段の登り口に、苔生した鳥居と祠があった。少し離れてケヤキの巨木があり、祠の傍に小さな藤棚があった。ケヤキの巨木に压倒され、隠れるようにひっそりとしていたため、地元の人達ですら、この石段下の藤棚に気付く者は殆どいなかった。この藤は、華やかな長い花房こそないが天然自生の若いやま藤だった。しかし、約5メートル四方に広がる小さな藤棚の下に入ると、命を育む若い鼓動が聞こえてくるようだった。

黒澤平助は、被っていた麦藁帽子をとり、天を仰ぎながらシャツのボタンを外して、ばたばたと胸に風を入れて一息ついた。風が微かにあった。微かな風であったがこの石段で十分もいたら、汗がひくような気がした。石段を登ってから、ここが略下社と上社の中間と思われるあたりに、巨大な綾杉があった。神功皇后が剣の鋒と杖を埋め、その上に御鎧の袖に挟まれていた杉の葉を地面に挿して目印としたものから根を生じ、巨木となったものだという。この逸話は、平助が幾分痴呆さみだった祖父と散歩に来た際に、何度も聞かされた話であるから真偽の程はわからない。

石段の登り口で、鳥居を潜り五十段も行くくと、そこで石段が途切れて赤いばらばらとした砂道がしばらく続いた。さらに30メートルも登れば、苔の付着した石段が再び現れるという風に、所々途切れ途切れの状態で上社まで続いた。でも、昔はこの石段は途切れることなくずーと上まで続いていたに違いない。老樹木が枝を交えて、うつそうとした影を落とす光景は夏には涼味万点だが、春秋にはそれが返って一抹の寂寥感を与えていた。冬には、枝からどさどさと音を立てて落下する雪の音が聞こえ、夏には麦藁帽子を被った土地の子供達が捕虫網を持って行き来した。

平助は背負っていたリュックを下ろして、その石段の途切れたあたりで小休止した。眼を上げるとペタリと夏が貼り付いて来た。高い杉の葉末が夏の空を切り刻んだ。天界の愛に導かれて、蝉の声が降ってきた。微かな風が、蝉の声を干渉させて其処だけ「ワーン」と唸っていた。石段と平行する小川の急な流れがあった。平助は地下足袋を脱いで、小川の縁に腰を下ろして足を浸した。汗とほこりでねばっこい足の指の股が生き返った。重い米を背負ってきた疲労感がずーと抜けていくような快感だった。痺れるような快感が、指の股から足首にまでじんと伝わって、やがて大腿から内股にまで這い登ってきた。

平助は腰の手拭で水滴を拭って地下足袋を履き直すと、リュックを背負って再び石段を登り始めた。登りながら、額をこしこしと手で擦った。擦ったところから、黒い垢がこぼれ落ちた。畑仕事ではよくあることだが、今日こそ風呂に入らねばと思った。首の手拭を強く引けばそれだけで、黒い垢が手拭に付着してくる。そんな時は、手拭が汗でしょっぱくなっている。垢は生きている自分の証なのだ。でもこの垢は額の垢なのだろうか、手の垢なのだろうか。皮膚を擦るところで死んだ細胞がこぼれるのが不思議でならない。

急に風が止んでしまったかと思った。汗が、これでは一寸も蒸発しやしないじゃないか。風が止むとやはり暑いや。汗は、これでも蒸発しているのだろうか。風の神様、もう一寸ばっかし吹かしてくれよ。山の風そより、森の風そよりとね。時折、思いついた風が、身体の深い内部から吹き出物のように表面に湧いて出た汗を、首から腕から、おでこから鼻から、運び去って行った。でも、これっぽちのお涙風じゃ、心地良いとまでいかないんでね。風の様、山の風そより、森の風そよりですよ。平助は、山の風そより、森の風そよりと口の中で、繰り返しながら調子を付けて登った。リュックの中の五升の米が揺れた。

平助は、その時妙にかん高い喚声を耳にしたように思った。

それは「ウワー」でもければ「キヤー」でもない。ひどく獣じみた叫びにも聞こえるし、生まれたての赤子が泣いているようにも聞こえた。一人の声が聞こえてきたと思うと、次には大勢して怒鳴っているようでもあった。思うにずーと以前に、インドか何処かで捕まったという狼少年は、きつとこんな奇声を発しながら山野を駆けていたのかもしれない。ひどく、金属的な響きかと思うと、人なつっこい趣もある。平助の視界の中に、やがて小さくそれでいて強い緋色が入ってきた。

石段の上方に緋の袴を付けた巫女だと思った。平助はその声の主が、発狂しているのではないかと疑った。ひどく烈しく、不安定で不安で、危険な光景に平助は眼を凝らした。燃えるような緋の鮮やかさに、平助は狼狽した。その素晴らしい緋色は、素早く動き一瞬たりとも停止しなかった。ふらふらと左右に動いたかと思うと、次の瞬間にはもう前後に動いていた。

平助は極度の近眼だった。眼鏡を掛けて来なかったことを後悔した。自分の視力がうらめしかった。発狂した巫女を目撃するという、劇的な場面の目撃者になれるかもしれないと思ったからだ。平助は、今にも緋色の袴に足を纏れさせながら、石段から

転げ落ちてくる巫女を待った。

それは、子供達の一団だった。他は全部白いランニングシャツを着ているのに、その不思議な子だけが前進赤だった。その男の子の赤が、大勢の白を圧倒して際立っていた。お手製の真赤なシャツを着て、これまた同じ生地地の短いパンツを穿いていた。顔立ちも、洗練された都会風の面立ちで、髪の毛は幾分カールして、混血ではないかと思うほど色白の美しい男の子だった。白いランニングの子供達は、明らかにこの辺の田舎の悪童どもで、てんでに赤服の男の子をからかいながら、はやしたてていた。その喚声が、空中を突き抜けて、緑の木々の間に木霊を作って甲高く反響していたのだった。

上方に位置する赤服の男の子の方を振り仰ぐと、悪餓鬼どもは立止まって手でメガホンを作りながら下方から一斉に叫ぶ。

「赤、赤、赤ちゃん、赤ん坊！」

「赤、赤、赤ちゃん」とやっておいて

「赤ん坊」と引つ張っている。更にそれを二三回連呼する。

「ほら、悔しいか。」

「悔しかったらここまで来い！」

その時、突然赤服の男の子が泣き出したのかと思った。その声が、金属音に変わった悪餓鬼どもの頭上を突如襲った。

「キヤーン キー！ オーヒヤー！」

その気合とも呪文ともつかぬ奇声に、悪餓鬼どもは、くるりと背を向けて一目散に駆け下ってきた。もう安全と思われる所で立止まると

「赤、赤、赤ちゃん、赤ん坊！」

「悔しかったから此処まで来い！」

「泣きたいかーほら、泣いてみる！」

多勢に無勢で明らかに形勢不利にも拘らず赤服の男の子は、決して怯まなかった。怯むどころか口をきつと結んで、小さな握り拳で威嚇した。都会っ子の線の細さは微塵もなく、一人で大勢に対峙する剣幕に、怯んだのはむしろ田舎の子供達だった。

「キヤーン キー！ オーヒヤー！」

この赤服の男の子の尋常でない気迫が、彼等を凌駕したからだ。この男の子のある種の妖気が、彼等をして恐怖感を抱かせたのかもしれない。集団でなくては対抗し得ない、不可思議な靈気を漂わせていたからだ。その奇妙な金属的な奇声もさることながら、何といても全身赤づくめの服からして、西洋の小悪魔の化身のような不安感を醸し出していたからだ。

悪餓鬼どもは、今度は何も言わずに駆け下りてくると第三者の出現に気付いて一様に警戒の色を浮かべた。平助のリユック姿に気付かなかった一人が

「赤、赤、赤……」

で仲間に小突付かれると、探るような目付

きで平助をみて照れた。彼等はそれほど、赤服の妖怪に集中していたらしい。平助を男の子の新手の庇護者と勘違いしたのか、悪戯鬼どもが一瞬たじろいだ。

平助は、彼等の警戒心を解く精一杯の笑いで問いかけた。

「どうしたんだ！」

「キヤーン キー！ オーヒヤー」

赤服の男の子は、つられて足を止めたが、怯んだ悪戯鬼めがけて一気に突っ込んで行った。それは行者の唱える奇妙な呪文のようにも聞こえた。田舎の悪童は、弾かれたようにもう駆けに駆けた。その男の子の奇妙な呪文に、一瞬身裡に悪寒が走り、それが鳥肌のように皮膚の表面に飛び出して小さなぶつぶつを作るのを平助は意識した。

赤服の男の子は、平助の真横をいっさんに駆け下った。大きな赤い襟の広がり、ことさらはつきりと見えた。猖狂熱の疫病神が、翼を生やして真一文字に飛んで行った。膝小僧丸出しの赤いパンツの男の子は、さながら獲物を狙い、風切って舞い下りる緋色の鷹であった。その後姿を見送りながら、小さな物の怪の世界から蘇ったかのごとく平助は「ほー」と息を吐いた。

下社秋宮の例祭には、青柴を大きく積上げて船を擬した輿を作り、緋と紫の衣をまとった祭神、大国主命(おおくにぬしのみこ)

との妃、八坂刀売命(やさかとめのみこと)

の人形を、丈夫な藤の蔓で括ってこの柴船に乗せ、これを土地の若者が裸で担ぎ三度神地を廻ってから、この石段を勢いよく駆け上がった上社本宮に入る神事があった。

このお祭りは「お船祭り」とも「裸祭り」ともいわれていた。これは、八坂刀売命(やさかとめのみこと)と、御子の建御名方命(たけみなかたのみこと)の舟遊びを模したもので、青柴は水を意味した魔除であった。この神事は、下社の祭神八坂刀売命(やさかとめのみこと)が、上社本宮の祭神である建御名方命(たけみなかたのみこと)のもとに逢いにいく、即ち母が出世した我子を一年に一度表敬訪問する仕構になっていたのだ。藤蔓と言えば、古墳時代には、石棺を木櫃に載せて藤の蔓で曳いた記録もあると言うが、実際「御柱祭」の御柱を曳くのにも、丈夫なこの地方の山藤の蔓が使われていた。

昔は八坂刀売命(やさかとめのみこと)人形が着る、緋と紫の衣装は毎年選ばれた四人の少女が丹精込めて縫い上げる慣わしであった。今はその習慣は廃れてしまったが当時、この縫い子に選ばれることは、少女達の大変な名誉であり他人から羨やまれたい。縫い子は殆ど皆その年の内に嫁として迎えられたからだ。縫い子の条件は、容姿端麗であることは無論のこと女万般のこと

が優れてできることが必須であったからだ。そうして結婚していった少女達が、全て幸福であったかどうか解らない。少なくとも金銭的には、何不自由のない家の嫁になれたことは事実だったのだが、彼女達の中には、この町を去って異国で家庭を持った少女もいた。頭も良く、美人であったから普通なら約束された人生を送れたはずであるが、それが反って禍となって不幸にも亡くなった少女もいたのではあるまいか。

遠くから、この衣装を着た八坂刀売命(やさかとめのみこと)人形を見た人は、一様に感嘆の声を上げた。柴の緑の中に衣装の紫が溶け込んで、緋色だけがくつきりと浮いて見えた。近くで見ると、柴の緑と衣の紫がはつきりと別な存在として理解できた。緋色と柴の緑は色彩的には、補色関係であるから、鋭い対比として人に意識させるはずなのに、人形の顔立ちもあつてか衣装は実に柔らかで穏やかに見えた。その際のむらさきは控えめに、緋色の後ろに隠れようとする。まるで緋色を、前に押し出した切った緋色は、むらさきの中ですすくと育まれているようだ。むらさきの愛がそうさせているのだ。

この石段を登って上社にでるまえに、平助はもう一度鳥居を潜った。でた場所は上

社の側面である。石段の出口、社務所前の藤棚を丁度真横から眺める位置にその鳥居があった。この藤棚は、この界限では珍しく盛夏に咲く土用藤だった。新道から上社正面にきて境内を眺めても、この石段出口の鳥居に殆どの者が気付かなかった。

「宮崎さん！ 米持ってきたじ。」
神社の裏手に回って平助は、その社務所のガラス戸を開けて中へ呼掛けた。

返事は無かった。

「宮崎さん 宮崎さん！」

平助は、かつて中に入ると、あがり框の上にリュックを下ろして外に出た。境内をぶらぶらしてれば神官の宮崎さんに会えると思っただからだ。

宮崎さんは、上社十五代目の神官である。昔上社には神官も巫女も大勢いたが、今は神官三人に減り巫女は一人も居なかった。ただ最近巫女は、アルバイトの少女を雇うのが通例であった。宮崎さんは、神官のくせにペンネーム「御子柴三郎」名で小説なんぞも書いていて、諏訪の同人仲間では知られた存在だった。神官だからといって、何も小説を書いてはいけないという理屈は無いが、坊さんが書いたそこらの週刊誌のくだらないエロ小説を読んだりすると、神官の宮崎さんの小説が気になるのだ。宮崎さんも官能小説を書くのだからかと、飲んだと時何時か平助は聞いたことがある。

平助は、白い袴と薄青の亜麻布の衣服を着ている宮崎さんが好きだった。神官姿の宮崎さんは、一人で飯を食っている宮崎さんだった。宮崎さんは、四五歳にもなつて奥さんも居ない。だが、一向に独身であることに気にする風もない。平助の父親が何回見合いを進めても、何時も笑って取り合ってもらえない。人の噂では、失恋していらい女を近づけないのだと言うが、平助は、それは嘘だと考える。それが証拠に神官の宮崎さんは多分に女癖も悪く、如何にも官能小説を書きそうな風情で大いに生臭かったからだ。米だつて本当は、買うことになつているのだが、中々金を払ってくれない。平助の父親は、神官長をしていた宮崎さんのおじいさんにえらくお世話になつたとかで米代を一度も請求したことが無い。平助の父は、宮崎さんの書く小説を何時も最大級の賛辞で誉めあげた。諏訪から中央の文壇に殴りこみを掛ける人材だとも言つた。父と宮崎さんが呑んだ時に、そんな父の賛辞にお構いなしに、酔っぱらうと必ず花嫁人形の唄を歌う宮崎さんだった。

《きんらんどんすの帯締めながら・花嫁
ごりようは何故泣くのだらう・・・》

宮崎さんの一人扶持位の米なんて量もしれていると平助は思っているのだ、こうして五升の米を持って、時々この石段を登ってくるのが常であった。なによりも、平助

は宮崎さんの話が面白かつたからだ。

「よおー。平助！」

「こんちわ！ご無沙汰で。」

「何時帰ってきた？」

「おととい。」

「お前の親父に聞いたら 夏休みのバイトと旅行で帰って来ねえすら なんて言つてたに。」

「その積りだつたんだけど。」

「やっぱ 諏訪は良いか。東京と違って・・・」

「まあ、そう言つことだね。」

平助は、宮崎さんと交わす少し振りの信州弁にその土地で育つた者だけが感じる親しみを覚えた。

境内を掃除でもして来たのか、手に箒と塵取を提げていた。そこに故郷に帰省した時に見る何時もの宮崎さんが居た。平助は宮崎さんと肩を並べて歩いた。

石段を上り詰めた上社境内の社務所前に、この付近でも珍しい藤棚があった。通常藤は五月下旬までに咲くのが普通だが、この藤は七、八月の季節はずれの盛夏に咲くので「時じき藤」「夏藤」「土用藤」とも呼ばれていた。元は熱帯アジア原産といわれ葉は厚く常緑で、濃い紫の花が上向きのも円錐花序についていた。蔓性の低木のマメ科の植物を藤棚に仕立てたのは、宮崎さんのおじいさんだという。この夏藤、別名む

らさき夏藤と言う種類で珍重され、地元婦人会の手で何時も手入れが行き届いていた。毎年、この一見季節外れに思える夏藤を愛でる夏藤祭りが開催されるので、訪れる人も結構多かった。夏最盛期に、紫や白の短房が垂れ一風変わった風情を醸し出した。

「おまえ、でかくなつたなあ。」
「そりやそうせ、何時までも子供じゃあ
るめいし。」

「親父さんよりでええぞ。おまえのお袋さん、でかかつたからなあ。」

「ああー」
宮崎さんに母親似と言われるのが幾分恥ずかしかつたが、確かにどちらかと言えば平助は母親似だつた。

「ところでー 宮崎さん米持つてきたじ。」
「何時もすまんな。親父さんよろしく
言つてくれや。」

「そつが、そんなに学校は面白くないか。」
話題は、平助の東京の大学のことに移つた。平助はニヤリと笑いながら、背伸びして力説した。本当は、口で言うほど平助の大学生活がつまらなかつたわけではない。唯宮崎さんにそんな風に話すことで諏訪を離れて東京に行ったという、子供じみた優越感を感じてみたかつただけかもしれない。

「大学には、シャンな女の子は居るか。」
「学校にかい？ 冗談じゃない、俺のところは工学部だもん 女つ気なんか何に

も無いぜ。」

「そうか、おめえ工学部か。そういつは知らなかつた。てつきり、おふくる譲りの文学青年かと思つてたが・・・」

「もつとも、近くの女子大の寮に、仲間とストームを掛けにいったとはあるじ・・・」

「このいかさま工学士め！ 色気だけは一人前になりやがってー」
手にした塵取を其処に置くと子供時代に戻つたように、幕で宮崎さんは平助に打つて掛かつた。平助は笑いながら、ひよいと身をかわして宮崎さんの箒の刀を軽くいなした。宮崎さんと一緒に居ると、何故か急に諏訪に帰つてきた実感が湧いてきた。宮崎さんは、この藤棚の掃除をしていたのが塵取の中に紫色の花房が見えた。

「知つているよ。」
「知つてるだかい。」
社務所に入ると、宮崎さんのきつぱりと口調だつた。

「その男の子なら、よく知つてるよ。」
「あの変な赤服の気の強そうな男の子。」
「気の強い？」

「ああ、そこらの悪たれと喧嘩してたじ。」
「喧嘩つて、取っ組み合いか？」

「いいや、口喧嘩だ。」
「・・・」

宮崎さんは、昔を回想するかの如く考え込むように暫し黙りこくつた。

「五人を相手にしてたじ、宮崎さん。」

「そうか。」

「あの子の周りに、何処となく妖気が漂つているような・・・」

「妖気？ 妖気がこりや良いや おまえ上手いことを言つな。」

宮崎さんは突然、平助の形容に大口開けて笑つた。平助は、宮崎さんのその笑いの中に自嘲めいた寂しさを感じ取つた。

「何処の子だい、何時からあんな子が来ただい？」

「この町の子じゃないさ。」

「やつぱり。」

「やつぱりつて？」

「だつて赤いシャツに赤パンツなんて、まるで毛唐のあいの子みたいで変だよ。」

「あいの子みたい？ やはり変か？・・・
実は・・・」

宮崎さんは、赤服の男の子の素性をすこし喋つたが、肝心な所へ来ると口籠つた。

「諏訪に来たフランス人の絵描きの子。父親はいまフランスに帰つたままだ。」

「絵描きの？」

「あの子の母親はこの町の出だ。お船祭りの縫い子だつた。あの子はいま母親の実家にいる。」

「そつだかい。」

「絵描きといつたつて、詰まらん絵を描いているに違いないのさー！」

宮崎さんのその口調に何処か投げやりな、しかも語気鋭いものがあった。平助は、赤服の男の子のことをもつと聞き質したかったが、それ以上踏み込むと宮崎さんの秘密に触れそうな気がして聞くのを躊躇された。宮崎さんの表情に、何処か聞き出すことを拒む気配があったからだ。

平助は、あの赤服の男の子と、白い神官姿の宮崎さんを一緒に考えてみた。男の子は、一人赤い翼を生やして境内を飛び廻り、傍らでそれをじつと夏藤の下で静観する宮崎さんがいる。宮崎さんが、小悪魔が猖狂熱の疫病神の庇護者として、珍しい夏藤の下に立っている姿だった。その藤棚の下には、何故かもうひとり笑いながら男の子を見詰める端麗な女性の姿を想像していた。

平助は、その日宮崎さんからビールを呼ばれて家に帰った。

その日は午前中から暑かった。

季節はすでに緑滴る初夏を通り越して、スツカリ真夏の気配がした。

平助は、あの石段のひんやりとした冷気を尻に感じながら、本を読んでいた。夏の暑さは、高い葉末の空間に舞い、今日は下まで降りて来なかった。肌の上にべたりと張り付いても来なかった。蝉の声のみ賑やかだった。

平助がふと視線を上げると、この前と同

じ石段の上方に緋色があつた。今度は眼鏡無しでも巫女と勘違いすることもなく、また赤服の男の子との再会だと直感できた。

喚声もなく、上から降るような金属的な呪文もないのだが、平助ははつとして自分の心臓が高鳴るのを感じた。見上げた石段の緑の向こうに、確かに同じ緋色が忽然と浮かび出たがどうやら二人連れだったからだ。平助が子供の頃にみた上社の祭りの緋の衣装、あのお船祭りの青柴の中にみた八坂刀売命(やさかとめのみこと)の人形がきていた緋の色だった。暗緑色の背景の中から、一人の紫色の女が男の子の手を引いて出現してきた。平助は、口をばかんと開けて放心のうちに二人を意識した。

薄紫色の日傘の女は、その赤服の男の子が、ひとりで石段を下りられるにも拘らず、石段を下りようと脚を動かす度に、ちよいちよいと繋いだ片方の手を持ち上げるようにしていた。平助は、この紫色の女が横に居ることでもう、男の子に話かけられないような気がした。はたして猖狂熱の疫病神、小悪魔なのか、それとも単なる毛唐とのあいの子に過ぎないのか・・・本当はもっと男の子の正体を知りたかったが・・・。

近づいてきた女は、感嘆の言葉もないほど、際立って美しかった。なによりもその服装が洗練され、明らかに土地の者は被らない広幅で緑色の帽子に、首に巻いた白い

ジョーゼットのスカーフを風になびかせながら、ノースリーブの濃い紫のワンピースを無造作に着こなしていた。上背は幾分小柄だが、申し分のない気品を漂わせ、日本人としては珍しい眼窩の深い顔立ちで、ナイーブな髪の毛が、夏の木漏れ日に燃えるように輝いていた。男の子の切れ長の大きな眼は、その女の眼と酷似していた。平助にはその紫色の衣装を着た女は、母親であることは明らかなのだが、まるで紫夏藤の精霊のように思えたから不思議だ。ひよつとして八坂刀売命(やさかとめのみこと)の化身なのかとも思えてきた。男の子の服と帽子の赤が、女のワンピースの藤色の紫に支えられ、石段の暗緑色を背景にして、二人の回りだけが、木漏れ日のなかでひと際鮮やかにオーラを発して輝いていた。

「よいしょ! よいしょ!」

二人は、互いに声を掛け合いながら石段を下りてきた。平助は、あたかも崇高なものでも眺めるように立ち上がって二人を迎えた。藤の精霊を眼前にして、その女とも目に目が合わせられなかった。赤シャツと赤パンツは、この前観た時と同じ服装であつたが、今日のその男の子は加えて少女の被るような、赤い帽子を被っていた。でも男の子は穏やかな気を発散しながら、女が手を離れたら、翼を生やしてそのまま飛び去って行きそうに見えた。男の子は、少

し首を斜めにして、気恥ずかしそうに平助を覗いた。その男の子が平助に笑いかけたと思つたのは、錯覚だったのであるうか。平助は半ば放心のうちに緊張して、何となく物の怪めく二人を神々しく見送った。平助の立っている位置から、数段下の石段までいった時、男の子は寄り添っている女を見上げて言った。

「おかあさま。」

そういうと、男の子は再び照れたように平助に顔を向け直した。其処には、強烈な妖気を発して駆け下った先日の男の子の面影はすっかり失せ、可愛いその仕草は母親に甘える極普通の男の子のようにも観えた。

「こないだの おにいちゃま。」

今度は、反応を確かめるように探るように男の子は、女の顔と平助を見比べた。

「そう。」

平助は、思わず振り向いた藤の精霊のよな女を拜むように深々と会釈をした。

物の怪めいた女が軽く頷いて会釈を返した。二人とも平助をみて笑つたように見えた。奇妙な二人連れは、平助の存在等全く意に介さず、そのままずんずん石段を下りて行き、忽然と姿が見えなくなった。

平助は、心のうちで《こないだの、おにいちゃま。》と呟いてみた。急に身体中がこそばゆくなつて妙に嬉しかった。老綾杉の葉末から、蝉時雨が石段に降っていた。

「こないだの おにいちゃま！」

平助は、二三度大声だして叫んでみた。

黒澤平助が、この石段で妖気めく赤服の男の子と、藤の精霊のような母 この奇妙な物の怪の母子二人連れの姿をみることは、それ以来二度と無かつた。もちろん敢えてこの石段での出来事の一部始終を宮崎さんに報告し、母子のことを問い質すこともしなかつた。平助は大学最後の帰省の折、この石段を登り「時じき藤(夏藤)」の藤棚の上社境内の社務所に宮崎さんを尋ねたところがあるが、卒業して東京で就職してからは、めつたに諏訪に戻ることもなかつた。

数年後、同人誌 諏訪湖 に掲載の御子柴三郎作の小説「赤服の男の子」が、第十六回の北関東文芸家協会の最優秀作品に選ばれた、という知らせを諏訪の父から受けた。父から送られた、御子柴三郎のその作品を読んでみた。小説の舞台と背景はこの諏訪の御柱祭で、放浪のフランス人絵描きと結婚した土地の娘の一生をモチーフにした私小説風の作品だった。娘は仏国で子を残して亡くなるのだが、平助にはある意味で、宮崎さんの妻帯しない理由が理解できた。作品は、どろどろした男女の三角関係の顛末を解き明かしていた。宮崎さんが酔うと必ず唄った童謡《きんらんどんすの帯締めながら・花嫁ごりようは何故泣くの

だろう・・・》が、小説の中にも描かれていたので、上社十五代目神官をしていた宮崎さんの心境が痛い程に良く分かつた。

平助は、宮崎さんに心ばかりの祝いの品として、丸善でモンブラン製の太目の万年筆を購入して贈った。丸善の店員が、受賞祝いの文字を万年筆に彫ることを進めたので「祝、時じき藤の宮崎さん受賞記念」と入れた。万葉集にある大伴家持の詩

《わがやどの時じき藤のめずらしく

今も見てしか妹が笑まひを》

を思い出したので、本当は「祝、物の怪めく時じき藤の下で」と彫りたかつたのだが止めた。簡単な宮崎さんの礼状を勤め先で受理したがそれ以来、四十年後の今日まで、石段に現れた物の怪母子に精気を吸い取られてか、宮崎さんの作品が中央文壇で、これと言つた何かの賞を受けたという噂を、黒澤平助は一度も聞かなかつた。

女性は、年取ると多かれ少なかれ物の怪の氣質を帯びると言うが、老いや死を単独孤高の鋭い感性や情念で歌い上げ、正に物の怪の霊を強く宿した俳人三橋鷹女の句に時じき藤(夏藤)を詠んだ次の句がある。

《夏藤やおんなは老ゆる日の下に 鷹女》

平成十六年・甲申の年にまた、御柱祭が諏訪大社で実施される。きつと多くの物の怪の群れが甦るに違いない。